

海士

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和十四年四月二十八日 運輸省(特)第...
昭和十五年六月二十五日印刷 昭和十五年七月一日發行

第二十六卷

第七号

七月号

天竺堂



新刊

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の手引

おつとめ

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八〇円

待望の書「浄土宗勤行の手引」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
尚編集の都合で大変遅れました事をおわび申
上げます。

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土 七月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

法然上人七百五十御忌記念

「講演と映画のつどい」紙上特集

宇宙人と仏教……………徳川 夢声 (2)

しつけということ……………新聞進一 (13)

石川啄木 (6)……………須藤隆仙 (18)

高僧伝 萩原雲来……………大橋俊雄 (16)

創作 世尊と阿闍世―第二回―……………鶴田湛泉 (34)

童心 仏心…………… (23)

信仰相談…………… (32)

仏教習俗覚書 (4)……………中村康隆 (24)

——お盆月の行事——

浄土

七月号

自他宗の学者、宗々所立の義を、
各別に心得ずして、自宗の義に違
するを、これはみなひがごとと心
えたるは、いはれなきことなり。
宗々みなおのおのたつところの
法門、各別なるうへは、諸宗の法
門一同なるべからず。みな自宗の
義に違すべき条は勿論なり。

法然上人御法語



十葉の花

天竺

宇宙人と仏教

——「講演と映画のつどい」紙上特集 その二——



徳川夢声

私のは講演ということですが、講演には違いありませんが、別に仏教のお話を申し上げるわけではございません。多少仏教のおしえに関係があるかもしれないというようなお話をいたします。

実は今日も私のところへ、神さまが自分の体をかりて人類に警告をあたえているんだ、というおばあさんが現れまして、一時間ばかり一人でたてつづけにお話をされました。そのなかに、二、三たしかに真理だとおもわれる言葉もございました。その方は教育も何にもないのでありますが、にわかにある時から一種の神がかりになったのであります。そして、説くところに、弘法さまも、親鸞聖人の名も出て

まいりまして、要するに、人類というものが、我欲に禍いされて救いがたい状態になっている。神さまは、これをござらんになって、ほっとけないということで、自分に宿ったのだ、というわけであります。

なるほど、なかなか良いことも仰言るのですが、妙なことも仰言るのです。「すべて、世のなかの出来事というものは二つの要素からなっている。」この辺までは我々の考え方と余り変わりありませんが、「全部がめおと（夫婦）である。」というんです。いろいろ夫婦の実例を並べますが、最後に「わが大和民族が夫で、外国が妻だ」というんです。こうなるともうついていけませんです。亭主の方が

大体いばっているから、我々には工合がいいんですがね。外国が女房みたいみんな言うことを聞いてくれれば……

(笑)。

どういふのですか、私のところにそういう人が集まるんです。いくらか私にその気があるかなとも思うんですが…… (笑)。

北海道の方から女の心霊家という人で、男の神さまの乗り移った人が、私のところへやって参りまして、岩手の方にいる十才で亡くなったその人の子供が乗り移つて、あらゆる予言をする。踊る宗教の北村サヨさんにも私はなかなか信任が厚いんです。また、メシ



氏夢の壇演

祖より、御当人はこれがうれしいらしい。

そのほか、すべて神さまと交渉の有りそうな人、仏さまとじかの取引きをしている方々が、どういうわけか私のところへやって来る。ことによると、私にこれらのすべてを統合した大神様が宿っているんじゃないか、というように

も考えることもあります。が、(笑) それにしては、何んら奇蹟も起りませんし、病氣も直すことは出来ません。また、霊の力を發揮することもできないのです。たゞ、私は、どなたのことかとも一応聞いていますから、「そんなことは、ないでしょう。それはばかばかしい。」というような批評はしないんです。一個のこれは何と申しますか、物語りかなんか聞いているつもりでいるのです。だから緊張しますよ。

ヤ教のお光さまも、私は御昵懇にねがっております。但し、お光さんはえらいんですね。宗教の話は致しません。私に信者になれとは決して言いませんですね。もっぱら美術の話でした。美術の造詣がなかなか深いのです。箱根美術館の館長という名刺をこしらえましてね。メシヤ教の教

この人はカトリックくづれだったが、今度の人はずうじやない、しかし、これらの人の共通していることは、話を

するところが「アーア……」というところでしたな。

「アーア、そのとき神さまは、」「アーアこのようなことはあるはずがない、アーア……」というふうに言うのです。このアーが共通しているのですが、まあ、アーであわせるのはオーケストラがみんなそうです。この「アー」というものの神秘性をそこに感ずるのでありましょうか……。

さて、このような教祖、宗教家、もしくは神霊家という人達が、今年は大変な年だといっているのです。璽光尊なども、今年がタマシイの入れ替のおこなわれる時だ。という。タマシイの入れ替といっても、山田さんのタマシイを中村さんに入れて、中村さんのタマシイを山田さんに入れるというような意味ではない。もろもろの悪業をおかすようなタマシイを全部きれいに清めて、そして、正しい方向に人類全体を向わせよう、というわけであります。それが、本年度において入れかえねばならんということが、方々で言われているようです。

実は私も正月からビクビクしていたのですが、二月も三月も何事もなく、いま四月も無事に過ぎました。それらの方々の仰せによりますと、とにかく年内にどれくらいことが起きるといことです。みな様方のように、法然上人のみ教えを奉ずる方々にはそういうような恐怖の予告は

ないと思いますが、とに角、今年おこるといいうのですね。

それから、おもしろいことには、空飛ぶ円盤を研究している方々が、宇宙人というものと相談いたしました。私がおんなことを申し上げますと。漫談にしか聞えませんが、工合がいいのですが、まともな大博士がいうと、皆さんは不安の念をいだくのではないかと思います。

ある一派の説くところによりますと、この地球が、やや斜^{サカ}かいになっていますが、この軸を中心としてコマのように地球が回っていますね。それが、こちら側にきますと、南半球が夏になるわけでしょう。それが逆になりますと、北半球が夏になるわけです。

春、夏、秋、冬はこの地軸の傾きによっておこるのであります。宇宙全体の星の位置も何千年に一ぺん、どういうわけだか分かりませんが変るのだそうです。そうしますと、その宇宙全体の配置がえのようなものがあるとき、地球の地軸が変るんだそうです。そうすると、太平洋や大西洋の水は、この地球の回り方で流れているものが、地軸が変って逆に回転しますと、海の水が陸へあがってくるんだそうです。ずーと昔あったんですが、生き残った人類の子孫が、今の我々なんです。それが伝説につたわる洪水といふのは、実はそれだといふんです。この洪水伝説は方々

の民族にあります。幾日も幾日も水が引かなくて困った。そのとき、えらばれた民であります一群が、ほかの動物と大きな方舟はこがねに乗りまして、安全なところへ移民して助かった。それがだんだんにふえて血族が受け継ぎ受け継ぎして今日に至っているという、ノアの伝説がありますが、これに似た伝説は方々の民族にあるところをみると、かつて地球上に大変な洪水があったと想像されるのであります。

この「地軸は傾く」という本が本屋に出ています。しかし買手がないんだそうです。これはインチキだろうというので、大きな出版屋は出しませんので、小さな本屋が、なる程、これは人類を救うてだてになるかも知れないというので出版をいたしました。何にか気狂いが書いたような本だからというので、この「地軸は傾く」というのは、ナンセンス小説ならいいけれど、大まじめに書いてあるから、これは正気の沙汰じゃない。だから売れません。精々七千部ぐらいしか刷らなかつたんじゃないかと思えますがね。私は、頭からこれは気狂いが書いたとしりぞける事はどうも出来ないのです。何ごとも疑うという性質がありますと同時に、何事もいくらか信ずるというくせがあります。全面的に百パーセント信ずるということもできませんし、百パーセント信じないということもできない。これは普通

の人間としては当然じゃないかと思うんですが。しかし、百パーセント信じることができたら、私は仕合せだと思えますね。仏教にしろ、クリスト教にしろ、マホメット教にしろ、私にはそのある部分は感服もし、ある部分は信ずることは出来ますけれども、全面的に百パーセント信ずることは私にはどうしてもできない。本当にこれこそ真理だというものが、私に感じられたら、どんなに仕合せだろうと思うんでありますけれども、どうも前世に於て何か罪を犯かしているのでしょうか、そういうわけにはいかないのです。ですから、何んでもたえず疑惑をもって聞きますと同時に、何んでも多少信ずるという結果になるのであります。

だから一種の講演というより、懺悔として皆さんに聞いていただきたいと思えます。正直なところを申し上げますと、決して脚色などをしてお話をいたしません。

今の地軸の傾くということですが、実は今年だということです。偶然にも教祖さん達がお説きになった、この世の建てかえが今年だということです。それから比較的科学的に空飛ぶ円盤の研究から入った人達が、天体の編成があるらしい、位置が少しずつ移動があるらしい。従って、地軸の角度が変る、そうすると、非常なエネルギーが起りまして、

いまの原爆だの水爆があわさると、核融合式に爆発のかたちになる。いずれにしても、水爆にしる、原爆にしる核兵器であります。あれが安全なように別々に分けてあるんだそうです。充分一緒にならないような倉庫に分けてあるんでしょう。地軸が逆になりますと、地球上に大変なエネルギーが起るんだそうですね。このエネルギーが作用しまして、アメリカや、ソ連が蓄えている核兵器が自爆するということです。それで、宇宙人達は見えていられない。仲々人格があるんですね。そのため警告に現れるんだそうです。

それなら、アイゼンハウワーとかフルシチョフとか親玉のところへ現われてくれるといいんですが、どういうわけか、名もない、微力な空飛ぶ円盤を研究している純心な青年のところへ宇宙人が現れるというんです。その辺が腑に落ちないんですがね。だが、青年達は聞いたそうです。

「何故あなた方は、我々のような無力な人間に仰言るのですか。それより一国の政治を動かす、軍隊を動かす力のある実力のある人達に、何故警告なさらないのですか」といったら、「いや、今地球上で政治上の権力をにぎっている人は、その権力に目がくらんでいて、とても問題にならない」というんです。だから、そのような純心な青年に、一大警告をするんだということです。そのうちのある代表者が

急に私の家に来なくなりました。「どうしたんだね」「えー、あの人はお見えにならなくなり止めました」というんです。いることはいるらしいのですが、まさか他の天体に連れていかれたということはないと思うんですがね。その次に代表者として尋ねてきた、痩せ方の紳士で、この人も熱心な研究家でしたが、この頃来なくなっちゃった。この団体を代表している神経質そうな人がいたのですが、その人も来られなくなっちゃったという。ちょっと気持が悪いですね。これはどういうわけであれなくなったんだか分かりませんが、この人達が向うに行つて、向うといつてもアメリカやヨーロッパじゃありませんが、何か空間ですね。日光とか奥多摩とか筑波山とか、ああいう山へ行くんです。私正気ですから、大丈夫です。これは根拠のないことをいってるのではないんです。まことにリアルな報告なのです。ですから、そのつもりでお聞をお願いします。おもしろいですよ、これからが……。

先きの円盤というのに幾通りもあります。非常に大きな円盤、人間が五人ぐらい乗れる円盤、一人乗りもあるそうです。人間の乗れない円盤もある。これは大きい方の円盤から電波みたいなもので操縦して地球上の人間の生活を探るために時々回すんだそうです。

そういえば、私、子供のときそういうものをみたことがあるのです。赤坂の表町に住んでいました。豊川稲荷から見付の方へ半丁ばかり来たところに焼いも屋があった。その横町の突きあたりに、五軒長屋の一番こっち側に住んでいました。ある初夏の頃だと思うんですが、この辺の記憶は危いのですが、何しろ日露戦争の前でした。その二階が六畳の間でしたが、その雨戸をしめに、私の母が二階へ上って行って、途端に「アラッ、アラッ」というんです。不断奇声など発する母ではないのですが、その母が、「変なものがある、変なものがある」と云うんです。私が階段をかけ上りまして、指差す方を見ますと、隣の横町をへだてて、下駄屋でしたが、その屋根の鬼瓦の上にポコンと正方形で真四角の上が淡い橙色でピカッと光っているんです。何だか見当が付きません。子供ながら不思議でした。あり得ないことだと思いましたから、はてな、と書いていたら、その四角のものがビューと音をたてて飛んでいったんです。そして、大岡越前の子孫の住んでいるといわれる、こんもりとした森の辺までその四角のものが飛んでいくと、そこで赤と緑にわかれて、ファーと下に落ちておしまいになりました。これを普通の人に話しても信じてくれないのです。何か、それはボヤボヤして夢でもみたん

だろう、というんですが、二人一緒に夢みるわけはないでしょう。

のちに、私は活動写真の説明者になりました頃、キネマカラーというのが出来ましたね。天然色です。天然色の原理は、赤と緑のシャッターが交代にフィルムのところへ出てくる。だから一つの番面が二枚づつあるわけです。ですから普通のフィルムの回転より倍になるわけです。そして、こっちは赤の光線を通し、その隣りは緑の光線を通すといったふうに、これが非常に早くおこないますからあの天然色が出て来るのです。

赤と緑があると大体天然色が出てくるそうですが、私が見たのも赤と緑に分かれたものです。この話は、この頃になりました、大部、ことに空飛ぶ円盤を研究している人達は信じてくれるのですが、一般の方々はいいかげんな創り話をしているとお考えになるのです。あるとき、座談会の席でこの話をしたら、阿部真之助氏が、「それは夢声君、黒と白だろう」というんです。「どういうわけだ」と聞いたら、それは、大岡さまの上だから黒白こくびやくを分けたんだらう」(笑) そういうシャレが入っちまうので、この話がいよいよ怪しまれるようになったんですよ。私は本当にすこしの嘘もありませんし、経験談としてお話をするのです。これ

が近年に至りまして、地上を偵察にきた空飛ぶ円盤から派遣された角盤ではないかというのです。そうすると、随分前から視察に來ているわけですね。

何んだって、私たちの二階の鬼瓦の上へ角盤が現われたのでしょね。思うに、宇宙人はあくまでも人間であります。もしかするとこの頃人類はそういうものをやっと発見したんでありますけれども、宇宙人たちには数千年も、数万年も前に地球上が危いとみて、早くも他の天体に移民したのでしょね。だから、非常に進んでいるのです。円盤でもって旅行するくらいわけではないのです。もしかすると、ここに将来有望な少年がいるからとか、何とかいつてきたのかも知れない。(笑)

ある山奥へ行きますと、降りてきまして、円盤は浮いているようですが、地上に落ちない。どうして浮くかというのと、引力を遮断することを知っているらしい。もしくは引力を逆に利用してスーッと離れる事も出来る。とに角、引力を零の状態にすれば、空間に浮いているわけであります。そこで、下の方から入りますと、そこにはお迎えの車があり、しばらく飛んで、広い宇宙円盤の御殿に立つ。広い部屋があり、そこに十五、六人の宇宙人がいたそうです。これは長老というのでしょね。色々質問してこれに

答える。こちらでも質問する。それは何語だろうというと、はじめは英語でいったら、英語で答えてくれましたが、そのうちに、こっちで思うと、相手が答えてくれる。つまり言葉というものは、まことに不便でこの脳味噌で考えたことを、口へ出して音波によって相手の耳へ通ずるという、まことに原始的なもので、こっちに一種の受信装置があれば、相手の考えていることをそのままにずっと感ずるわけですね。今のテレビにしたって受信装置を合せますと、はっきり出ますでしよう。言葉も出て来る。こっちに受信装置があれば相手の考えていることはそのまま分る。こんどはこうでしよう、と思うと、こんどは向うが受信する。だから言葉はいらないというんです。これを彼らはテレパシーといっています。従来のテレパシーという意味と大部違っている。それで、彼らは戦争というものは、いかに馬鹿々々しいことであるかを知っている。地球上の人類が戦争のために原爆、水爆ということを考える、これを平和産業などの利用とかいっていますけれども、いざという場合にはお互に威嚇し合っている。だから大戦争がおこるかもしれない。地軸が傾かなくても、こんど第三次大戦争がおこったら両方でぶつけあって、丁度映画の「渚にて」の如く、あゝいうように、北半球の人間がみんな一人もいなく

なっちゃって、遂次南半球に及ぼして人類が死に絶える、
というようなことがないとは云えないのですよ。勿論、い
まその原水爆を一番沢山もっているソ連のフルシチョフさ
んとアメリカのアイゼンハワーさんが、何とかして戦
争がないようにしたいと思って交渉しようとしています。

イギリスも原水爆の保有、更に今度それに加した国があ
ります。サハラでもってやりましたね。自分の国では決し
てやらないですからね。遠い処でやるんですよ。他所の方
へ放射能が行って死ぬ人間がいても、自分の国で死ぬ人間
が出なければよろしいですからね。ありがたい考え方でサ
ハラは沙漠で二発ばかりパンパンとあげました。いまは原
爆や水爆は骨が折れるけれども、もっと簡単に作れるよう
になるでしょう。台所の隅でコンロで火をおこして作れる
ようになるかもしれない。例えば、どこの国でも水爆をも
つようになったら大変なことです。

こういうようなことをやり出していると、宇宙人はテレ
パシーで或は、空飛ぶ円盤だの角盤だの、地球上の人類
の動向を調べている。「可愛そうだ」我々は地球をいち早
く見捨てたんだが、今残ってこれ迄栄えて来た人類を亡ぼ
したくないから、警告を与えるために、ちょいちょい来る
ので、決して戦争するためにはくるのではない。現に、ア

メリカの空軍に未確認部隊の専ら探索する一つの隊が出来
ている。ブラジルには空飛ぶ円盤に関するお役所ができま
した。日本あたりでも中曽根さんあたりは若いだけに、
「もし必要とあれば日本にも空飛ぶ円盤を研究するお役所
を作ろうか」と仰言る。これは研究すべきですよ。日本で
も政治家が段々若くなるにしたがって科学的になってきま
すから、日本にも空飛ぶ円盤賞というのもできぬとも限り
ません。

事実こんどアメリカでは、I・C・B・Mが成功したよ
うであります。これはソ連の方が大部先きんじました。
万一戦争がはじまりますと、モースコーからニューヨーク
あたりを襲えるのです。狙いは殆んど誤まらない。ニュー
ヨークの上空をはずれたところでも、ピカドンとくれば、
ニューヨーク全市はおろか直経三十マイル位は人間が死に
断えるというようなのが、一パツや二ハツではないのです。
両方とも無数にもっているといっても、直接アメリカから
ソ連を打つというのは、こんど出来たそうですが、量産さ
れてはいません。今、戦争がはじまったのでは間に合いま
せんが、その代り中間中距離誘導弾の発射基地をソ連を囲
んでもっています。外交上それが問題になるのですがね。

たとえば、それがソ連側がI・C・B・Mを、ニューヨ

ーク、ワシントン、フィラデルフィア……或いはロスアン
ズルセ、サンフランシスコなど、アメリカの要処要処へ向
けてあるんだそうです。ボタンさえ押せば発射するように
なっている。同時にアメリカ側は、モスコ行、レーニン
グランド行などというように要処要処をやっつける体制が
できている。いざとなったら、バラバラでなく、一処でボ
タンを押すんです。ピアノのキイみたいに並でいまして
ね。先きにやった方が勝ちじゃないかと仰言るかもしれん
が、そうは簡単にいかない。いかに何んでも、モスコか
らニューヨークまではざっと三十分かかる。向うが打出し
て五分かかると、こちらが分かるんだそうです。ワア来た
な—という事が分ったら、こっちでも敵の方へ全部向けて
しまう。これで全部パーです。たゞし、この大切なお役所
だけは、そういう場合でも地下室の厚い壁であらゆる放射
能を防ぎ得るところに入っていますから当分は生きてい
る。当分ですよ、これで人類は全滅だと思いがら……。。
映画の「渚にて」は空想映画でありますけれども、まかり
間違うと、あのようになりかねない可能性は充分あるので
ございます。

話はもとに戻しまして、私の知合いが宇宙人の長老に逢
った。どんな顔をしているのかを聞いたのですが、白人が

多いそうです。ヨーロッパ人、アメリカ人、ブロンド、ブ
ルーネットもある。男と女の区別がちょっとつかぬそうで
あります。大体同じようなユニホームを着ていまして、縫
目のない服だそうです。日本のこの頃流行の化学繊維、或
いは今の所は反物にして両方で縫うようなことをしていま
すが、もっと進歩すると上着なら上着というものが、縫目
なしに生産されるようになるのじゃないかと思うんです。
地球上ですらこの通りでありますから、宇宙人たちはそう
いうものが出来ている。どっか変ったことがないか、とい
うと、大体地球上の人間とは変ったところがないが、足が
非常に長い、というんです。そして靴のようなものを履い
ている。これは考えますに、地球から離れたところへ行き
ますと、引力は距離の二乗に反比例しまして、引力のない
ような所へ行くと上と下がなくなる。引力があるから、我
々はこれは下と思っているのですが、引力がなくなればフ
アーとしてしまう。空中に浮んでしまう。そこでそれを防
ぐために何か磁力のようなもので下へピタッとつくような
靴を履いているそうです。それで足が長くなっているのじ
ゃないか、ということをお私が申しますと、宇宙人に会って
来た人が私の意見を聞いてうなずいていました。それをみ
ると、余り科学知識のある人じゃないことは確かですね

(笑)

さて、いかがでしょうか、私がいま申しあげましたことは、少しも作り話がないんですよ。ないけれども皆様は、さながらほら吹き先生の講演を聞くようにお笑いになっていらしゃる。又、お笑いになって結構なんです。私の話を聞いてシーンとなりまして、どうすれば宇宙人と会えましょうか、申込書は何処でしょうか、なんて云われると困るんです(笑) そうなられても私には処置がないんですかね。冗談としてお聞きになって結構です。

しかし、こういう話もあるということは、皆さんもお考えになっておいて頂きたいのです。

この点、私の処へ教祖じみた人がまいります、何といつても、事ここに至りますと、クリスト教よりも仏教の方が深いところをいつているような気がするんです。仏教の色即是空、空即是色という言葉がありますが、これは立派な素粒子論、電子論のようなものといえるのです。色とはマイクロホンでもテーブルでも、皆さんでも、一切の現象をいうのです。これは空だけれども、空即是色だ、空が是だというんです、これは大変なことを喝破したものです。恐らく仏教以外にはないでしょう。今迄でもニヒリズム、虚無主義がちょっとこれに似ていましたが、半分です

ね、全部無だということは、そこまでは仏教と同じですが、無が有だということは仏教だけです。だからニヒリズムは色即是空を説いただけですね。空即是色とはいわない。こうなってみますと、たしかに仏教の教えというものは非常に深いところを云っていると思うんです。何となれば、ガラスのコップに水を注ぐと漏らない。だから抜け道はないと思うでしょう。しかしこれを拡大すると隙間だらけなんです。これは空です。何にもないに等しい。それが縮めたからあるんです。このコップ一つでも色と空です。空は非常に微小なものからみればつつぬけが出来る。現に光線はつつぬけているではありませんか、本当に何も通さないものは光も通すはずがない。ですから空即是色ですよ。仏教というものはえらいものです。

湯川博士と話しをした時も、仏教というものがいかに深いものであるかという事を申し上げられました。しかも湯川博士に伺ってみますと、あの人の中間子論というものが、実験の結果中間子というものをそこへ抽出しまして、これが中間子だという発見ではないのです。どうしても、この一つの原子なら原子の運動をみていますと、陰電子と陽電子というものがある。大体、陽電子が真中にあって陰電子が廻りをぐるぐるまわっている。一つあって、一つま

わっているのが水素です。だんだん重くなるにしたがつてこの数が増してくる。だが、それだけでは説明がつかない運動がある。丁度、中間があるのではないか。中間にそういうものがあるとすれば、これなる運動の説明がつく、そこで中間子があるに違いない、というのが湯川博士の論旨です。ところが、のちに湯川博士自身は発見しなかったけれども、外国の学者が、天王星と海王星の向に望遠鏡には入らないけれど、メイ王星というものがある、ということが理論でさきに発見されております。湯川さんは理論的に中間子というものを発見した、この偉大なる科学者の湯川さんは、靈魂を否定しませんでしたよ。

「靈魂というものはあると思いますか、ないと思いますか」と伺ったら、「いや私どもの科学は、否定の論理というものを殆んど持合せていないので、ないということは云えないんです。あるということは証明できても、ないということは証明出来ないのですね」

この湯川さんが、私がたまたま生かじりの仏教の話を持ち出しましたならば、「その通りですね、だから、現在地球に宗教がさまざまありますけれども、最も深き哲学者が、やはり感心するだけの理論をもっているのは、私は仏教だけではないかと思えます」といわれました。しかも、

仏教は、科学が今にいたって、たどりつきました結論を、二千五百年前に、お釈迦様は思惟をこらされたのだから、えらいものですね。不出世の宗教的天才ですよ。

ところがまた、ここに別の説がある。もしかしたら、お釈迦様は宇宙人じゃないか、というのですがね（笑）つまり後輩の地球上の人類があまりつまらない生活をしている。つまらない争いをつづけている。たまたまお釈迦様のようなお方を派遣して、人類を少しでもいい方へ導こうとするのではないか。だから、お釈迦様も、クリストも宇宙人である。聖徳太子も宇宙人だ。法然上人も宇宙人かもしれない。その証拠は第一お釈迦様は脇の下から生れていますよ。クリストにしても処女にして懐胎するわけではないでしょう。これも宇宙人ですよ。聖徳太子もクリストもみな宇宙人の証拠だと思ふんです。これは断定することは出来ませんけれども。以上、最近おこなわれて居ります、さまざまな根拠のありそうなお話すが、皆さんお聞きずてになつて結構です。こういうような説もあり、真面目にそれを論じている科学者もあるということを申し上げ、しかも仏教というものの哲理は大変に深いものである、ということをも門外漢の私から申し上げます、お話を終ることといたします。（教学院主催の講演会における要旨）

しつけとこころ



新聞進一

わたくしには、中学一年の女の子と小学五年の男児とがあるが、家庭の教育についてはいろいろ考えさせられることが多い。

やかましい都会の生活、巨大なマスコミの強い刺戟の中で、子どもたちは結構スクスクと育ってゆくが、しかし兄弟げんかをしたり、ハラハラさせられたり、困ったりする場面によくぶつかる。自分の行為に責任もてる、しっかりとした人間になってほしいと常々思っているが、さて教育はどうすればよいか仲々むずかしい問題である。子どもは、それぞれ一箇の人格で、決し

う考え方や生活態度の育成が、いわゆる「しつけ」ということであろう。

「しつけ」ということは、手もとに在る「広辞苑」でひいてみたら、

しつけ（躾）①礼儀作法を身につけさせること。身についた礼容。身だしなみ。

②（教）児童の本能、衝動を抑制して社会生活に必要な善良な習慣を、身につけさせること。

とある。②の解釈は教育学的な意味でのそれらしいが。とにかく、エチケットとかマナーとかいった具体的な面と、モラルの意をふくんだ精神的な面とあることは確かであり、多くはその二つの場合が融合していると思われる。

「しつけ」は古くさいことばではなく、親たるものの責任であり義務であろう。このことは外国の方がずっと進んでいるように思われる。身近かなことと言えば、テレビ番組にあるアメリカのホームドラマなどによく窺われる。例えば御承知のように

「パパは何でも知っている」というドラマでは、思春期の娘と、高校生の子と、かわいい少女と三人の子のある中流家庭の生活が素直に描かれているが、感銘するところが多い。野球に凝って学校を怠けたり、自動車に夢中になる息子に、一家ぢゅうで気をつけてやるといったふうに、家族がお互いを尊重し、いたわっている光景が美しく、ユーモアが一家の中をふんわりと包んでいるのが快い。三十分のお話そのものはたあいもないものが多いが、そうした片鱗に示される健全な家庭教育ぶりは、全く羨ましい。やはり、家庭の中での自由な話し合いの空気がなくては、しつけということも一方交通になってしまつて、しつくり行かないものであろう。このドラマでも夫婦がとても仲睦まじいので、そういうことが、大きなしつけの要素になっていることを感じる。しつけ教育の一つの場として教会在が折々に出てくるが、これは、ふつうの日本の家庭では見られない点であらう。

わたくしは、「しつけ」は、一種のおしやれの教育だと思っている。チャーミング・スクール大流行の時代で、女性はずますます美しくなり、男性までもおしやれをするようになって来たが、美しくあつて気持のわるいわけではない。当用漢字表からは外されているが、漢字で「しつけ」を書くとき、「身を美しく」というわけか、「躰」の字を宛てる。身のまわりをきちんと整える、そういったことから始めて、生活のあらゆる面で秩序を保ち、美しく整えること、それがしつけの第一歩であらう。規律正しい人間にするというモラルが、そのまま生活の美につながってゆくということなのである。

このおしやれは、容貌や服装だけでなく、ことばの使い方などにもいえることであらう。必要な以上に敬語を使ったりするのは、決して美しいことばでなく、むしろ職場などでは簡素化した敬語が望ましいが、ことばの使い方にも無駄がなく、アクセントや語の切り方にもよく注意を払った話しぶりは大きな魅力であらう。明快である上に、センスのある話し方の教育は、もっともって考えられてよい。

しかし、また考えてみると、しつけでは「身につける」ことがたいせつであらう。そのためには、いくら口をすっぱくして説いてきかせるよりも、自分で自覚して一つの事を徹底的に実行するようにしむけて行った方が、はるかに利口なやり方であるが、これが仲々むずかしいことである。そうでなければ始めは強制的にでも繰返して習慣づけることが、たいせつである。作家の森田たまさんの話がテレビであつたが、三十年来「日誌」と「日記」とをつけておられるそうで、その「日誌」とは簡単な記録程度のものらしいが、朝起きて顔を洗うと同じように、夜就床前に一日のきまりをつける意味でメモするのだそうである。一方の「日記」は作家として必要な感想録の類らしい。仲々かくれた苦心があると思つて聴いた。毎日顔を洗わぬ人はなからう。それは気持がわるいからである。そういう生理的なものになつてしまえばよいのである。

る。さらにもう一步突込んでいえば、醜いもの、よこしまなもの、卑しいものに対する一種の本能的な嫌悪感を伴って来るようになれば、しつけは成功したものといえよう。森鷗外は日露戦争で出征中、陣中からその女の子を「きれいずきな子にしておくれ」ということを再三留守の妻に書き送っているが、おそらくこういう意味でのしつけ教育を考えていたのであるまいか。

志賀直哉さんの文学は、作者の好悪の感情が、そのまま善悪の判断に直結しているということがいわれる。すなわち、美しいものをそのまま正しいもの善いものと考えて、作中の人物は行動しているというわけである。この点非常に独断的でもあるが、永い作家の鍛練とその良識とが、これをほぼ均衡のとれた美しいものになっているのである。志賀文学を引合いに出して例としては、適当でないかもしれぬが、そういった感じにまで、しつけを持ってゆければということなのである。

「現在の学校教育では、しつけは行われ

ていないのか」という疑問があったら、それは大間違いであろう。もちろん種々の場合があつて一様に律することはできないけれども、客観的に見て、あらゆる教科を利用して人間形成の教育が為されているはずで、もちろん道德の時間も活用されているよう。子どもたちにとって学校という集団生活の場で、話し合い、地域社会の協同性にまで発展してゆく人間関係の勉強は、じゅうぶんに用意されているよう。先生方も新入学の一年ともなれば、おしっこの世話から始まって、いろいろとしつけをして下さっていることは、改めていうまでもないことである。しかし、何といつても多勢一しよの教育であるから、しつけはやはり家庭における両親協力の教育に、比重がかかって来よう。ことに、母親の果す役割りは大きなものがあるう。

最後に、宗教的なしつけということであるが、団地生活などのため、仏壇もなく神棚もない家庭の多い現状では、困難な点も多いが、一家そろつてのお墓まいりとか、

お盆やお彼岸や御命日など折々の行事をえらんで、いろいろくふうせねばなるまい。毎日の生活の中に織りこんでゆければ一番望ましい。わたくしは寺院に生まれながら、そこから飛び出してしまつて、じゅうぶんな宗教教育も自分の子にしていないので、そういう自分の姿を顧みると、脇の下に冷汗の滲むのを覚えるが、やはり広い意味の敬虔な宗教的雰囲気尊ぶ気持は、何とか教えたいと思う。然し、一方、宗教的なしつけには、仲々デリケートなところがあつて、下手をすると、強要になり、押しつけになつてしまつて、敏感な子には反抗的な逆効果を来すこともある。やわらかなムードを持ち、温い人間的な接触がある場で考えてゆかねばならないであろう。今日では時代のバック・ボーンはほとんど消失しているが、新しい民主的な時代意識を伴った教育観が出て来ているはずである。新しいしつけの在り方を、おたがいにもっと考えてゆきたいものである。

（筆者 北海道大学助教授
文部省教科書審議委員）



近代高僧伝

萩原雲来伝

梵語学の泰斗マックス・ミュラー博士は、其の自叙伝に「梵語研究の学界は未知の鉱山のようなもので、誰でも道具をもって働らきさえすれば、必らず金片を掘り出せる」と述べているという。その未知の鉱脈は我国では南条文雄・高楠順次郎等によって開拓されたが、其の高楠の影響を受け、浄土宗初の留学生として、明治二十九年九月梵語学研究のためストラスブルヒカイザーウィルヘルム第二世大学のロイマン教授に師事したのは萩原雲来であり、十カ月の後には彼の後を追って渡辺海旭がドイツに渡った。

彼は明治二年二月土橋次郎の次男として、

東京四谷左衛門町の紀州藩邸に生れたが、幼にして慈父を失い、夙に出塵の志をいだき憐愍雲台を拝して得度し、その名竹次郎を雲来と改めた。雲台は大船在玉繩の貞宗寺に住していたが、多くは留守僧を置いて寺務をゆだね、自からは中央にあつて、恰かも宗門が東西両部に分かれ拮抗の弊あることを歎き、東西を統一して宗法の興隆をはかるべく企てたり、又北海道の開教を志して札幌に竜雲寺を創建、別狩 瑞竜寺を建て、更に浄土宗高等学院長に就任するなどして宗門のために献身の努力を重ねた僧であり、又道心堅固の徳僧でもあった。従つて雲来が師の膝下で養育を

うけたのは支校入学前後の数力年にしかすぎなかった。支校から宗学本校に入り、俱舎及び大毘婆沙を研究し、同三十年七月業を終えるや、直ちに教授を拝命、居ること二年。三十二年には選ばれて海外留学生となり、ドイツに学んだが、彼が師事したロイマンの許には各国から俊秀があつまり研究にいそしんでいた。その中にも一きわ学績に光彩をはなっていたのは雲来と海旭であった。彼の洋行を聞き我事のように喜んだのは師雲台であり、絶対といつてもよい程、弟子の出立に見送ることをしなかった師であつたけれども、此時ばかりは喜びのあまり珍らしく玄関に出「道心堅固のこと」と只一言いわれたという。師の風格は身の丈の低い、顔色の黒いことなぐ精悍な、どちらかと言えば禪僧としての面影を多分にもっていた人であつたらしく、その影響をうけてか雲来も「僕は禪宗がすきです」と口走ったことがあつたという。

外遊し研学に熱心であつた彼は殆んど外出することもなく、一人室にとじこもり、ヤシヨミトラの俱舎論釈やハリバドラの八千頌般若経註釈、さては梵文菩薩地の研究をつづけ

たが、それにしても彼が漢訳仏典のみならず、西藏語まで解することができ、梵藏漢を対照して仏教梵語の個々について言語学的な説明を試みた所に、ヨーロッパの到底追従し得ない梵語学界に世界的権威と仰がれた所以があった。曾つてロイマンから高楠博士に宛てた消息に「荻原はすばらしい人物である。それに学問はヨーロッパ人が及びもつかぬものである。お前がいつもいつていた辞典の編纂にはもってこいのものである」と記されてあったという。これをもつてしても如何に偉大な学者として、留学時既に衆人の認むるところとなっていたかが察せられるであろう。時に方紀正に三十五歳の頃であり、「今少しヨーロッパで勉強させたいが何とかならぬいか」というたつてのロイマンの言葉で、留学は一年延長させられ、ケンブリッジ大学に学ばれたが、「荻原こそはドイツの学風を会得し、自分の心血を伝え、師の使命をはづかしめず、このロイマンが学風を愈々宣揚せる天晴れの学者よ」といい、「菩提薩多雲来」とまで称揚されているところを見ても、その精進振りがほづかがえるであろう。

彼は又時間を大切にされ、無駄にすごすということはなかったようで、研究生生活を一途におしすすめられた彼の生活は極めて規則正しく、反面如何に熱心に仕事をつづけられてゐる時でも用事があれば、たとえ仕事の途中であつてもさつと止めて次の事に移られるという鮮かさもあり、「今少しやれば一段落つくから」というようなことはなされなかつた。そしてどちらかと言えば仕事の結果とか、研究の成果ということには重きをおかれず、「その時その時のことに全力を向なければならぬ」と話されもし、又平素から人の生命はいつ何時どんな事になるかも知れないからといって、念珠を腕から離さず、外出の時には必らず名刺を持参されたという。

三十八年ドクトルフィロソフィアの学位を得て帰朝され、宗教大学教授のポストについたが、大正元年には招かれて東京帝国大学講師となり、一時豊山大学にも出講し、又出でて芝中学校及び淑徳高等女学校長にもなった。そして「仏教梵語の研究」によって文学博士の学位を得たのは同十一年五月、傍ら檀林誓願寺にも重住、ここが関東大震災にあい

堂宇倒壊の後には寺地を多摩に移し、武蔵野の自然の中に再建をはかるなど寺門経営のためにも尽瘁、同十五年四月大正大学の創立を見るに及び、仏教の基礎的研究と学徒の養成、且つは国際的學術の貢献を企図して聖語学研究室を設けて、其の主任教授となつた。かくて一生を梵語学研究のために捧げ、「研究したいことは幾らでもあるが、そう何時までも生きられるものではない」と述懐し、還暦の際「せめてあと八九年は生きていたい。そうすれば大体今までの研究をまとめることができる」といった彼は、多くの学績と著書をのこし昭和十二年十二月二日、六十九歳をもつて示寂せられた。法名を、
迎蓮社接誉上人心阿独有雲来大和尚
という。

(大橋 俊雄)

×

×

×

×

石川啄木^⑥

——法然へ還る道——



仙 隆 藤 須

聖道門と浄土門

法然上人が浄土宗という史上絶大なる意義をもつ仏教の新しい方向を定められた時、先づ一番始めに着手されたのは、仏教そのものを整理分類して、自づからのためにその中のどれを選ぶか、ということであつた。

いわゆる教相判釈（略して教判ともいう）といわれるもので、その詳細は不朽の名著選択集第一章段に述べられる通りである。しかも上人のそれは道綽禪師の説に基いて、聖道門、浄土門と二つに仏教を大別されたのであるから、実に整然そのものであつた。

他宗の祖師方の教判は三つのもの、四つのもの、あるいは五つのもの、などあり、しかもその中で更に細分されるから、ずい分煩雜となるが上人の仏教はそうではない。自分の力で聖者の道を進んで仏という最高人格を得る道（聖道門）と、自分本来の眞の姿に目覚めて、その無力なるを悟り、*「助けて下さい」*と救いの主を求めて、高きへと引上げてもらう道（浄土門）と、この二つだけである。

私達はこの二つのうちどれかを選べばよい

のであつて、実に態度のはっきりした宗教なのである。

私はこれまで長々と啄木の宗教観を述べてきた。

一体何で私が今、法然上人へ還る道として、ここに啄木という一個の人間を登上させたのであろうか。

それはこの稿の冒頭にふれておいた如く、啄木の宗教観の帰結が、実は法然上人のお示しになられた、浄土念仏の道に連なるものだったからなのである。

啄木の宗教観に就ては既に詳述の通りで、今再び部分を引用することも紙数を増すだけである。

それで極く結論的な敘述となるが、彼の宗教観が、*「念仏の道、法然上人へと連なるものである、ということに就て述べていくこと」と*したい。

啄木の宗教観の中で一番問題となるのは第二段階の「宗教へ向う心」である。私はこれを「浄土念仏の心」、こう思っているのである。

勿論啄木は「念仏」のネの字もいっておら

ない。のみならず過去に於ては法華經に關心をもったくらいで、彼の生涯のどこにも「念仏」という表面立てられたものを見ることはできない。

しかし彼の晩年は「念仏」であつた。少くとも無宗教といっているその底の中にある無宗教ならざるもの、即ち私が「無宗教の中の真宗教」と表現したところのもの、又第二の「宗教へ向う心」として縷々説いてきたところのものは、立派な「念仏の心」である。

禪寺に生れた彼、そしてあのような聖道系の思想に一時なりとも心酔した彼、その彼が最後に偽りのない事実として、押えきれずに自身の真底からほとばしり出た心は、実に念仏の心だったのである。

こういっただけでは理解できない方があるかも知れない。

しかし「念仏」そのもの、「法然上人」のみ教えそのもの、を真に自分のものとして、その中に生かされ、その中に我が世界の総べてをもっている人には、十分理解して頂けると思うのである。

念仏は借りものであつてはいけない。人真

似であつてはいけない。あくまでも自分自身のものでして、しかも自分自身の真底から涌出されるもの、「南無アミダ仏」の一声々々は押えきれずに「ほとばしり出たもの」でなければならぬのである。

それには先づ自分というものを徹底的に本来の自分、嘘、偽りのない自分、正真正銘の自分にしなければならぬ。飾りがあり、「つくろい」があり、見せ掛けがあつては、決して念仏は出てこないのである。

法然上人が「一文不知の愚鈍の身になして」と示された一枚起請文のみ教えも、実にこの赤裸々な本来の自分に還れ、との思召しであり、念仏する者の心（安心）として、三つの重要（三心）の中に、深く信ずるという「深心」が

説かれ、しかも「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」という強い内省（信機）が、仏の本願を信ずる（信法）必須条件となつてゐるのも、このためなのである。

してみると啄木のあの強い「人間そのもの」との取組み方は、実に浄土念仏に於ける人間意識と同様の立場に立たされるものであつて、窪田氏の言葉を借りていうならば「人生に對して誠実」であつた彼。その彼に無神論といいながらも、「神に祈りたい」という



函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌 矢ぐるまの花

函館公園の啄木歌碑

救いを求める気持ちの出たことは当然のこととさえ理解されるのである。

法然上人が最も力説されたところのものは、人間が真に本来の自分に目覚めた時、そこに求められるものは何か、ということだったのである。このことは御著書や御法語を拝読すれば直ちに信解されるところであるが、あの智恵第一といわれ、持律堅固なる上人が、本来の自分を見出し出した時、浄土の門でなければ真に救われることはできない（往生）、聖道門ではとても仏の道を歩むことはできない、と叫ばれたのは、実に偽りなき、真実の姿として合掌され感泣されるのである。

今、啄木の場合でも、十八才から二十才頃までの樗牛や梁川に傾倒していた時代は、いわば仏教的に「聖道の道」に関心をもっていた時代なのであって、しかもその上自我意識という、およそ非聖道的なものをもっていたのであるから、勿論これを完結へと進めることはできなかったのである。

自分の生活的無力を知るたびに、啄木の心は無神論へと意識的に傾いたようであるが、

しかし既述の通り、その無神論の中に、やはり「求むる心」「押えきれずにほとばしる心」はあったのである。神様と議論した夢、の話などは実によくこの間の消息を物語っているものではなからうか。

要するに啄木は宗教の面に於て、聖道を進むこと能わず、必然的に浄土的な方向に動かざるを得なかった人間ということができると思うのである。ただ残念なのはこの「念仏の心」ともいうべき第二の宗教への心は、ほんの芽を出したところで彼の一生は終わっているのであって、この点彼が生き長らえていたなら必ず浄土系に依拠を求めていたであろう。という私の推断も、単なる想定としかならぬのである。

しかしとにかく、啄木という一個の人間を思う時、「聖道は今の道に非ず」として聖道を捨て、浄土を選ばれた上人に心から合掌させられるのである。

法然へ還る道（結びとして）

ある哲学者は現代の危機として、人間が人間を過信する、という人間至上主義（自我至

上主義）を上げている。そしてこの危機を克服するものとして、至上主義の独善ではなく、完全に己を放棄し、一切の私を否定する精神的態度、即ち「宗教的無我」ということを力説している。

私はこの宗教的無我ということの純粹を、法然上人の念仏の中に見出す。先に述べた深い内省からくる「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」という信機（凡夫としての自分をそのままに見ていく）の人間観こそ、実にこれである。上人は著書「三部經釈」の中で「斷善闡提のごとくなるもの也」と信機を釈しておられる。斷善闡提とは梵語でイチャンテイカといい「斷善根」「信不具」、つまり本性として仏道を成ずることのできないもの、をいうのである。浄土念仏の人間観は、かくの如き徹底したる自己否定である。そこには一片の独善も、一切の「私」も認められない。ただあるのは「罪惡生死の凡夫」だけである。

念仏はここから始めて出てくるのである。

この泥凡夫に真に目覚めた時、思わず「ほとばしり」出たものがお念仏であり、それは子供が「お母さん」と思わず叫んだ、あの虚

心の叫び声と同じである。

更に念仏は逆に信機の心を起すもの、ともいわれる。「念仏すれば三心はおのづから具すなり」(勅伝二十一)

ここに念仏に於ける精神的態度は、逆順の展開に於て、常に「宗教的無我」を問題とし、重要なもの、としているのである。更に極言すれば、これなくして浄土の真髓は無い、といってさえ過言ではないであろう。

法然上人の念仏は、このような意味で、現代益々「時代を導くもの」とされるのである。

しかしこのような、浄土念仏の真髓に徹することは勿論簡単ではない。念仏そのものは易行(容易な行い)と説かれるが、経には「難信の法」と示されているのである。(阿彌陀經)

確かにこれが右の如く、高次なる精神的態度を問題とする以上、そう一朝一夕に簡単であろう筈がない。なればこそ「そのまま」で益々念仏を唱えよ、念仏行から信心の道、更には信心から称名の声、と円融無礙なる仏への道が一層の尊さをもって開かれてくるので

もある。

人間は誰しもが虚心に自己を見つめなければならぬ。人生に誠実とはこのことであり、虚心に自己を見つめた場合、そこには必ずや無力な、罪深い、泥だらけ、の自分あることに気づくことであろう。ここに、この無力、この罪深さ、この泥だらけ、を救うものとして、弥陀の本願が説かれ、念仏が教えられるのである。

法然上人は、実にこの人間の必然的なあり方、もっといい換えれば、「本当のあり方」「嘘のないあり方」を、説かれたお方だったのである。

啄木の生涯を見る時、この人間というもののあり方、即ち「実存」とでもいうべきものを、つくづくと考えさせられる。

精神主義的だった彼、虚無主義者としての彼、そして、それらと、それらの推移とを合せて、更に「真実だった彼」。

彼も又、偉大なる法然上人の道へと還りきたる誠実の人だったのである。二十七才という若き死に、このことのみを尊く思うことである。宗教も道徳も、一切を否定してしまっ

て、唯「永劫不変の性格の根」のみを残した彼、ここから開けゆくものこそ、浄土教の心であり、若死にこそしているが、この点で彼を「法然へ還る道」に一層連るものと結びたいのである。

(了)

(付言)

こんなに尨大な紙数を費す気持はなかったのである。しかし書き出してみると、啄木の宗教観ということ自体が、これまで余り知られておらなかった問題だけに、細かに論証叙述しなければならぬ必要に迫られ、勢い長大のものとなり、又この部分だけに重点がおかれ、後の法然上人の浄土念仏に関する問題の部分が、少し尻切蜻蛉になった感があるのである。

しかし上人の浄土念仏に関しては、既に「浄土」誌に於ても、諸先生方から懇切に説かれている問題でもあり、この点の詳述は浄土念仏それだけを、一課題として述べなければならぬ。これ又、長大なものとなるので、この方は略さして頂き、ほんの結論だけを述べて前者と結ぶことにしたの

である。要は、啄木の宗教観を通瞥すれば念仏との問題も自づから領解されてくる、と思われるのである。もし幾らなりとも納得のいかない方は、この付言を読んで、もう一度啄木の部分を読んで頂きたいのであるが、啄木の生涯は実に浄土入門の生涯である。なればこそ「法然へ還る道」とされるのでもあり、くどいようであるが、私は彼がもし二十七才以上生き延びたならば、必ずや浄土教的人間になっていたであろう、と断言するものなのである。

彼が強い宗教的立場（第一の宗教的立場）から、もちろんも壊れ落ちたのは、本論に重説した如く、自我の至上と、加えて借りものの宗教観のためだったのである。

そしてその自我が益々高められることに、勿論借りものの宗教では満足できなかったものであり、その借りものが否定されて自我の最高のみが認められた時、次には当然自我そのものが、收拾のつかないほど、手におえないものになってしまっていたのである。ここに始めて虚無が生れ、その虚無は単なるニヒルなものではなく、どう

にもならない自分”ということ、逆にそのまま高次なものへと連なる要因となったのである。であるから虚無といっても、彼の虚無は単なる虚無ではなく、いわば「虚無そのものが虚無ではない」という弁証法的在り方だったのであり、この弁証法的在り方こそ、そのまま「浄土念仏の在り方」なのである。彼の『時代閉塞の現状』はこれをよく物語るものであり、二十三才から二十四才、友人への書中に語られた虚無の告白、無軌道な生活、「体を毀してくれ」という悶え、それらの中から驟然として明日を求めるこの評論の生れてきたことは、極めて注目させられる事実なのである。

こうして啄木の宗教的立場を考えてみると、私には、人間というものは、形こそ異なるが、皆一様に「同質の在り方」へと帰入されるもの、と信じられてくるのである。生きる、ということ自体が、あくせく、あくせく、と喘ぎきっていることであり、そんなに喘いでおりながらも結構浮ぶ瀬のないわれわれ。このいわば運命づけら

れたわれわれが、喘ぎきっているのだ、とそのことに本当に気がついた時、そこに始めてよりよき生き方が開けられるようである。

言を換えれば、”自分の限界を知った生き方”とでもいうべきものであろうか。

今、啄木に就ていうならば、あの虚無への到達こそ、本当に限界を知った生き方だったのである。

法然上人は、この限界というこたで苦しまれた。智恵第一といわれ、それなのに「智恵をもて生死を離るべくば、源空なんぞ聖道門をすてて、この浄土門におもむくべき」（和語灯録）と仰せられ、又「智恵のまなこしる、行法のあしなえたるともがら也。聖道難行のけわしき道には、総じて望みをたつべし」（同）と仰せられた。「われは何によて生死にはとどまれるぞと、はづべしはづべし、悲しむべし悲しむべし」（三部経釈）と号泣され、遂に「烏帽子もきぬ法然房也、黒白をも知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者也」（西宗要）十悪の法然房、愚痴の法然房と

して本願の前に平伏したのである。

なればこそ浄土念仏は先論の如く「信機」(限界を知る)ということを経第一の条件とするのである。

要はこの立場こそ、万人がかくあらねばならぬ真実の立場であって、この立場に立される時、そこから先の問題として「念仏」が生れてくるのである。又この立場を知らぬ不実の人間に、真の人間としての立場(在り方)を教えるものとして「念仏」が勧められるのである。

啄木は前者の側に自づから至った人であって、当然「念仏の道」へと帰入されべき人だったのである。

かく「念仏」というものに於て、人間の真の在り方を究められた上人は勿論偉大であるし、人生というものに対して、上述の如く真剣であった啄木も又、やはり近代の逸人と目されるのである。

極言すれば上人の浄土念仏の教えは、恐らく人類総べての、当然還り来たるべき道かとも仰がれるのである。

聖道天台より上人の門に入り、浄土二祖

となった聖光上人の如きは、聖道門を知るほど浄土門の偉大さがわかるといわれているが、念仏門こそ実に万人の帰結というべきであろう。親鸞聖人は、故に法然上人を絶対の師とされたのであり、かの、表面実に念仏門を攻撃している日蓮上人までが、実は「法然上人の一分流である」といわれるに至っては(家永三郎博士)、いかに上人の浄土念仏が最高のものであるかということに、ただただ感激させられ、この教え

にあづかることの有難さに嗚咽するのである。

今、石川啄木という近代の逸人について、上人の念仏の教えの、一層の尊さを知ることのできるのも、念仏が万人の帰結として、むしろ当然のことかとさえ感ぜられ、ただ念仏して、筆をおくものなのである。

北海道森の自坊の煖炉の側にて

——(終)——

(童)(心)(仏)(心)

明るく。

もつと明るく！

新聞を見ても、ラジオを聞いても、暗い、嫌な事ばかり。まるで梅雨空のように。

せめて家庭の中だけでも、明るい、晴々した毎日を送りたいものです。

「ほめたたえ運動」「美点、長所だけを見つめる運動」を全国的に展開したいものです。

こども達にも、食事ときなどを利用して、「おかあさんはね。きよう、消し忘れた街灯を、お使いに行く途中で四つ消したの。あなたは、何をしたの。」

「あのねえ。ぼく。おじいさんがリヤカーを重い重いって、ひっぱっていたから押してあげたの。」

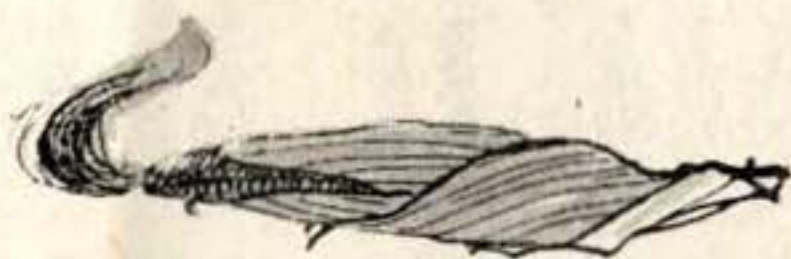
などと、一日にした善事を話しあい、喜び合うことです。

二人よれば、他人の悪口、噂話に終始したくないものです。

明るく、もつと明るく、毎日を送りましょう。

(桐)

お盆の行事



中村康隆

魂棚の奥なつかしや親の顔 (去来)

心にて顔に向ふや魂祭 (鬼貫)

懐かしさもひとしお、悲しさもひとしお、さまざまな愛と情念とを織りまぜてつづるお盆の風物詩くらい、温かい人間の血潮のかよった絵巻物は少ないでしょう。同時にまた、仏教的な習俗としても、この月くらい語るに余ることもないでしょう。本誌にも毎歳書かれていることだし、私も何回か盂蘭盆の歴史やら習俗やらについて書いてもいるので、今回は月間の行事を中心に雑記することにしよう。もっとも、そのどれ一つをとっても興味はつきませんが、こゝでは以前行事解説風に書いたメモを順を追ってとりあげてゆこうと思います。

(一) 釜蓋朔日 かまぶたついたち

七月一日を釜蓋朔日と呼びます。いわゆる地獄の釜の蓋が開いて、いよいよあの世から亡き人々が舂ってこられるお盆を迎える朔日だという訳です。場所によってはエンマの口あけと呼んだりもする。別に亡き人々がみんな地獄への口あけと呼んだりのですが、そこは日本人らしい洒落しゃれでおちている筈はないのですが、むしろ江戸前のタンで、ことさらにこう呼んでるのです。むしろ江戸前のタン力を切ってみせるような呼び方ともうけとれましょう。地

嶽に落ちた人までも、この月の祭りばかりは故郷に販して貰えるのだから、亡き人のためにするこの月の祭りこそしつかりとせねばならぬ、といった気持ちもあつての呼び名でしようか。

昔は、この日、お寺ではお施餓鬼の旗を立てたし（今でも村によっては行なっている）、また家々では夕方に迎え火の焚き初めをしたもので、中にはこの日から月の間中タスマツ焚きをするところもありました。

去年のお盆からあとで新仏を出した家では、この日にお盆の燈籠竿——盆柱とか燈籠木竿ともいう——をたてました。それで、信州の諏訪あたりでは、この朔日のことを「燈籠立て」といって、新盆の家には親類や隣家の人々が集ってきて、庭に燈籠を高々と立てるそうです。

七月にもなると、赤トンボが飛びまわり始めるが、このトンボはあちこちで精霊トンボとかおショウロさんと呼ばれてます。関東地方では黄ヤンマのことを精霊ヤンマと呼び、また精霊トンボとかホトケトンボとかいっています。丹後のあたりでは、朔日は精霊が赤トンボになってこの世にかえってくるということから、トンボツイタチとさえ呼んでいます。

またこの日は「盆路作り」とか「刈路作り」とかいつ

て、墓地や、墓地から我が家までの道を掃除します。遠い西の国から販ってくる人々のために、草を刈って道をきれいに清めるわけです。

盆なりとむしりけりかな墓の草。

信州や上州など、この日の供物に初麦の粉で固い焼き餅をつくってお供えするところもあり、お盆まつりが穀物まつりをかねていることを示していると思われます。

（二）七夕と七日盆

牽牛と織女と今宵逢ふ

天漢門に浪立つなゆめ

ひととせに七夕のみ逢ふ人の

恋もつきねば夜のふけ行くも

万葉集以来この国の詩人たちの詩情をいたくかきたてた七夕のロマンスは、中国においても、すでに「詩経」にこの星の詩がおさめられてあるくらいに古い説話なのです。

七夕は、後世、奇数の月の奇数日をえらんできめた五節句の一つとされたのですが、元来秋の初めの半月の日として、古代の農民たちが畑作物を祖先のミタマ（お精霊さま、ご先祖さま）に供えた祭日だったのです。万葉集などでも、七夕をナヌカノヨ（七日の夜）と読んでいて、本来

は七日の夜の半月祭はんげつさいであつたものが、所謂七夕の説話にからんでお星さまの祭りかのようになつてしまつたものなのでしょう。

天文学上の説によると、およそ三千余年の昔には、この七夕の頃が、銀河を東西にはさむワシ座と琴座の二つのアルファ星が銀河上にもっとも接近して見えたということであつて、そこからいわゆる七夕説話が生れ、また次第に星まつりの意味が加えられてきたものでしょう。

ヒコボシ（彦星）は牽牛星けんぎゅうせいの字の如く中国では牛飼いの男を意味し、タナバタツメ（棚機はたおつ女）は織女星しよくじよせいの字の示すように機織り女めを指していて、中国上代の農民層の田園ロマンスを、そのままに天上にきざみつけたことになりましょう。日本では遠い上代に村はずれの水辺にしつらえた棚たな（懸造り）に織り機はたをおいて聖なる乙女が神の來臨を仰いで一夜を祭つて過ぎ、翌日（七日）神送りのため村人たちが禊祓みそぎばらいを行なつたものらしいとされ、そこからタナバタの呼称よばなが生れたといわれています。

七夕の日の行事には中国の星合説話とそれから生じた乞巧奠こうでん（裁縫が上手になるよう、転じては歌など技芸の手の上がるように祈る祭り）の風俗以外に、この禊祓みそぎばらいの要素も多く見受けられることが出来るのです。

七夕竹と呼ばれる笹竹を六日の夜に立てて翌朝流す所もあり、薬まや真菰まこもなどでつくつた七夕人形や七夕馬や牛などを流したり、ネムやイボタの葉で目や身体を撫なでて流したりするとところさえあります。また髪を洗つたり、水浴みしたり、虫ぼしや池や井戸のさらいをしたりする（池替盆ともいう）ところのあるのも、もともと大きな祭りにはつきものの禊祓みそぎばらいの名残りといえるでしょう。お盆のまつりは、元来盆正月と並び称されることでもわかるように、半年に一度の一ヶ月にわたる大祭だったので、七日正月と対照的な七夕はこの大祭の中心として最も大切な満月祭を迎えるための物忌みを初める祭りだったといわれます。青森の佞武多ねぶたや秋田の竿燈かんとうに代表される「眠り流し」の行事も、神霊の送迎にまつわる禊祓の変形ともいえましょうし、秋の豊作を願い勤勉を誓う農耕まつりにふさわしい行事といえるでしょう。

七夕の笹竹も、正月の松飾りと同じで神霊の憑代よりしろとして立てているのです。笹竹を憑代とするのは七夕に限りません。北九州では八朔節供にも立てるし、地鎮祭や棟上げに立てるところも多いことは、御在知でしょう。

だが七夕、に迎え祭る神霊は、それがお盆と一連の祭りなのだから、当然祖霊であつてよいわけです。七夕を一名

七日益と呼ぶのも、そこからです。それで、盆棚と同じような七夕棚を設けるところ、藁や真菰で七夕馬や牛をつくるところ、七夕流しをするところなど、あきらかにお盆とつながる一連のみ魂祭りの性格をしめす風習が見受けられます。

そのほか、七日益としてお墓掃除をし墓前に棚をつくったり、晩には迎え火をたいたり、七度飯・七度浴びをする
とよいとしたり、またミガキ盆といって仏具や食器その他の家具や墓所までミガキ清めるといった風習も残っています。

例の野見宿弥のみのすくねと当麻蹴速たいまのけはやとの故事も、七夕の相撲として有名ですが、朝鮮では現在もお盆に相撲をとる風習が残っているそうですし、千葉県などにも盆縄で寺の境内に土俵をつくり相撲をとるところがあります。

三 お 中 元

お盆につきものの一つに中元の売出しやら贈り物やらがあります。中元というのは、本来道教の三元の説では七月十五日をさし、通常天の神太乙神たいいつしんを祭る日とされますが、唐の律令制度りつりょうを記した「六典りくてん」では、中元は地の祇かみ（下元は水の祇）の日となっています。この三元説は古い四季の

満月祭から孟夏の祭を欠いたもので、漢の董仲舒とうちゅうじよの「春秋繁露はんろ」には古の年四回の祭りは四季それぞれの作物さくもつ（韭・麦・黍稷・初稻）をもって先祖と父母とを祭るものだといっています。それが三元説になったのは、印度の三季節に符合しようとしたものか、それとも天文学上の季節的大変動論によるものかははっきりしませんが、日本でも同様に四月の満月祭はうすれているようです。

この三元のうちの中元が、のちに中元に際しての贈りものの意味に転用されているのですが、その贈りものにはもとは麺類や魚類その他の食料を主としたもので、信州などでは塩魚や干ひもの昆布等の海物を用いる所もあります。こうした中元のやりとりには二つの意味があったようです。

第一には、中元を歳暮さいぼのやりとりになぞらえて盆セイボというところもありますが、また盆供ともいうように、元来お寺へ附け届ける盆供と同じように、祖霊供養のために親類縁者の魂棚へ御供物を持って訪れることから来ているのでしょう。殊に新盆の家へは、盆まいりとか棚見舞などといって、生米やソーメンなどの供物を持って訪ねる風があり、また提灯や燈籠を贈ったりする風も一般に見受けられるところではあります。

第二には、生盆いきぼんとか生身玉いきみたま（生御魂、生身魂）とかいて、両親のそろった家ではわざと生臭なまぐさ（盆肴ぼんざかな）——片親の者は十五日になますなど——をたべる例があり、生魚や刺鯨を親にたべさせるところも多く、豊橋辺では昔は十日に蓮の飯に刺鯨を二刺三刺し添えて親類へ贈り、これを生見玉いきみたまの祝いとか中元の祝儀とか云ったということです。また嫁に行った娘などが生米または小麦粉等の食物を持って里帰りして親に馳走するのを生盆といい、またその贈りものをそう呼ぶところもあり、相州などでは親分にあたる人の家は盆礼に賜りものをするのを生身玉いきみたまとか生盆いきぼんとかいっています。これは正月の年玉と同じことで、親とか親方に贈りものをしてその生命いのちの福さちにあずかろうとするもので、今の中元の贈答もこうした風習から転じた一面もあるうかと思われまゝす。

（四）孟蘭盆会うらぼんえ

年ごとにめぐってくるタマまつりの日、家毎に子は親を慕い、親は子を懐かしんで迎えまた送るお盆の行事——迎え火、送り火、寺まいり、魂棚、棚経、ヤブ入り、エンマ詣で、どれ一つとりあげても、それぞれに民俗の長い歴史がしみこんでいます。

お盆は、古くからある民間の祖霊を迎えてする秋の初めの満月祭と仏教の孟蘭盆会とが一つになった習俗と解すべきもののようです。孟蘭盆うらぼんという語は、通例、逆吊さかつるし（倒懸）を意味する梵語ウランバーナの音訳だとされます。印度人には、もともと、まつられぬ祖先の霊はあの世（父祖の国、死者の国）で逆吊さかつるしの苦しみを受けるとし、したがって祖先の祭りは子孫の義務であり、祖先への負債だと考へ、月々の新月祭を供餅祖霊祭（ピンダ・ピトリヤージュナ）ともいって、団子・団飯・供餅の類を祖先に供える祭りをし、その他秋分にもヤマ（えんま）と先祖を供養し、更に太陰暦六月末三日間と一月十五日にはマハーラヤとよぶ祖霊大祭を営んだものです。広い印度のことで土地や民族によってちがいますが、クルックの書いた「北印度の民間宗教と民俗」という本を見ると、北印ではいまも陰暦八月末の夜、燃燈祭を催し、燈火を点じて訪れる祖霊らを迎えてまつり、翌朝主婦が唐箕と箒とを持って「神は内、貧は外」と唱えながら家の隅々で打ち合せて、のち唐箕を村の外に貧も一緒にすててくるということで、日本の節分祭りに似ています。しかし、デュボアの本では、南印の死者年祭は陽暦十月の新月の日から九日間の祭りでもハナブミまたはダサラと呼び、二月ほどのちに催される燃燈

祭とは別だといっています。古典プラーナによると、マハナ
ブミはデュルガ祭（シヴ神の妻の祭）九日間の最終日の祭
りとされていますが、とにかく日本のお盆のように広く祖
霊を祭る風が見られたわけです。これに對して、夏安居
——すなわち雨期三ヶ月間の修行の集りの終りの日に僧た
ちが自恣（懺悔滅罪）の集りをする、その七月十五日にそ
の修道僧たちを供養することこそ、何よりも逆吊しの苦し
みを救う最上の道だと勧めたところから出ているのが、仏
教の盂蘭盆会の儀規、行事だといつてよいでしょう。

多くのお坊さんたちが集つて修行する雨安居を終えてま
た明日から諸国遍歴の行脚の旅へ出るという日に修行中の
反省会を開く時を選んで、信者たちがこの日にお坊さんた
ちを供養する習わしが、お釈迦さまの生きておられた頃か
らあったので、その風習こそ、古いマハーラヤ祖霊大祭に
代えるにたりる仏教徒の祖霊祭にふさわしいやりかただと
したものでしょう。

しかし、この盂蘭盆会は印度よりも支那や日本の方が
盛んになり、より適切なものとして行われているようです。
というのも、これらの国の民俗では、印度とちがつて、も
ともと七月の満月祭が秋の収穫をいわうみ魂まつりの日
であつたからに外ならないからです。

そして盆棚に飾る色々の供物——稲穂や粟穂、洗米、胡
瓜や茄子、麵類などは、元来それが同時に祖霊を迎えて麦
作畑作の収穫を感謝し併せて稲粟等の豊作の祈願をした農
耕の民の秋まつりであつたことをよく示しています。
またみ魂迎えのしるしに、盆花を山からとってくる風習
も残っていますが、床の間に生花をいける風習もこうした
みたま迎えのための花いけから起つて来たものだといふこ
とです。

棚経やこの 暁の闍迦の水。

盆棚に迎えてまつる祖霊のために、暑い日中をお坊さん
が棚経にまわります。何はなくともせめて盆中は清らかな
水を祖先のみ魂の前に供えて家中で拝みたいと思います。
祖先のおかげでこうして生きていられる——この美しい
敬愛の念と、キウリやナスの牛馬でなつかしい人々が戸毎
に販つてこられるとする——このほのぼのとした情愛の心
とを、私たちはいつまでも持ち続けてゆきたいものです。

(四) おせがき

唐音の施餓鬼身にしむ夕べかな。

お盆の前後には方々の寺で施餓鬼会が催おされます。餓
鬼とは本来亡者（プレタ）とか先祖（ピトリ）とかいう梵

語の意識で、前にも述べたように印度では亡くなった人をまつるのは子孫の負い目だとし、もし葬祭をしてくれる近親者がなくて供物も上げず父祖の国へ送って貰えないと、死者は亡霊、邪霊、悪霊の類（毘舍闍、羅刹、夜叉、部多）になって、人界近くさまよい十字路や戸口などにいて人畜に害を加えたり時には鬼病（つきもの）の原因になると信ぜられていた。そこで印度の古代宗教でも万霊祭をしてこれらの霊を慰めねばならぬとしたのです。ところが南印で密教が盛んになると、仏教でもこうした餓鬼を救う儀式が作られ、陀羅尼神呪が誦せられるようになったのが、今日の施餓鬼の起りで、悪霊邪魔の類を鎮め慰めるには、三界万霊をまつるおおらかな慈悲の心のあらわれとして法によって施食をすることだと説いたもので、唐の不空三蔵（セイロン島人、八世紀）の訳した「救拔焰口餓鬼陀羅尼神呪經」が本規とされるが、口から火を吐く亡霊というのは墓地の鬼火から联想したもので、マヌ法典では義務を怠ったバラモンがなるとされています。中国では、梁の武帝が梵本をさぐってこの焰口餓鬼の故事を知り、水陸会（川施餓鬼の仕方）の儀文を作ったと伝えられており、日本へは不空の弟子の恵果に学んだ弘法大師がこの経を持ち販って行者が毎夜魔障を除くためにすべきだとされたが、

後ち民間の祓いの儀式にかわるすぐれた仏教の行事として、新亡や無縁、悪霊等を含む三界万霊供養の法式として広く用いられるようになり、特にお盆には寺々で行うようになったのです。古い日本の荒魂とか御霊、怨霊とかの思想からする、多分に民俗的な背景を持った行事といつてよいでしょう。

とまれ、この行事を通じて、有為転変の世の不幸な魂や災難にたおれた人々への深い思いやりと社会愛の発露を説くわけです。人間お互いが愛で結ばれ、愛に支えられて助けあって共に正しく生きてゆこうとするのが仏教の根本精神であって、お施餓鬼もまたこの精神の現われの大切なことを教えるものといえるでしょう。

六 地 蔵 盆

七月または八月の二十四日には、お地蔵さまをまつつてあるお寺や町の辻などで地藏盆がいとなまれます。また亡き子供たちの霊、特に新盆の子の霊のために地藏まいりが行われます。お地蔵さまくらい民間になじんだ信仰対象も少ないでしょう。小さい子はろくにあの世へ送ってもらえぬので齋の河原で遊んだりさまよったりしている、それをお地蔵さまが温く見守ってくださいる——こうした思想から

このまつりの風が起ったといわれます。

難波鑑なにわかがみという本に、「今日きょう七月二十四日は地藏の御縁日にて町々の辻にワラベども供物灯明とうみょうをかかけてまつるなり」とみえ、日次記事には、この日、街角まちかどの石地藏の前に子供たちが香華をそなえて地藏まつりをするのは道饗祭みちアエマツリの遺風かと、申しています。

二十四日を地藏菩薩の縁日とするのは、支那の六朝隋唐以来の風がつたわったのですが、元来はこの日が下弦の月をまつる古代の祭日にあたっていたため、特に地藏講も普及を見たわけで、特にお地藏さまが亡霊の冥土めいどへの導き手（引路菩薩いんろぼさつトモ）と信ぜられるところから、霊をまつるお盆月の二十四日には地藏盆がさかんになったのでしょう。そして、一面には冥土へゆけぬ子供たちの霊の守り手だとの信仰から子供たちが主宰するまつりともなり、また一方では亡き子供たちを弔う親心からするまつりとしても行われるのです。更にそれが子供の無事息災を祈って、幼くして死んだものの霊をとむらう供養会ともなっているのです。六地藏詣むくぢさうもぎでをしたり、六斎太鼓といって六斎念仏の人たちが六所の地藏堂を詣でて、太鼓を撃ち鐘かねを鳴らして踊う躍念仏やくねんぶつをしたものだそうです。

背せの子は夢路を廻めぐる地藏かな。

この日を送り盆とか終い盆とか呼ぶのは、この下弦の日のまつりをもって、ひと月にわたるお盆の行事のシメクリと考えたからでしょう。お盆に迎えた精霊しょうりやうを送る十六日を送り盆とするところ、いや十五日に送るとするところ、二十日盆をもって裏盆として燈籠送りをするとところ、三十日まで燈籠をともすところなど、まちまちだが、地藏盆は純真な子供と子供をもつ親たちのミタマまつりの終りを彩る美しい情愛の花といえるのでしょう。

このほか、お盆月の行事には語るべきことがはなはだ多い。燈籠流し、盆がま、大念仏など、折があったら述べたいと思うが、次の機会にゆづろう。

（大正大学講師）

×

×

×

×

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

種々の宗教を信仰すること
の良否をお教え下さい。

——おたずね——

お盆が近づいて来ました。毎年思うこと
なのですが、お盆になると、お寺から棚経
といって、坊さんがやって来てお経を上げ
て行きます。家でもまた誰かがお寺詣りを
します。お盆というと、ふだん忘れていた
お寺のこととか、仏教のこととかを思い出
すのですが、どおして、お盆と仏教とが結
びついているのですか。先頃のラジオの宗
教の時間で、「日本人はクリスマスでキリ
スト教徒になり、お正月になると明治神宮
などへ参拝して神道になる。そしてお盆が
来ると仏教徒になる」とっていました
が、このように、日本人の信仰が二重三重

になっていることは良いことなのでしょう
か、悪いことなのでしょう。

私の家には、お仏壇も神棚もあります。
そして両方へ手を合せて拝むのですが、此
頃では何か割り切れないものを感じます。
どちらか一方に決めた方がいいのではない
かと思います。

そうはいつでも、それは気分の上のこと
で別に、信仰の上でどおしてもというので
はないのですが。こういった気分では本当
の信仰は出来にくいと思います。この
点、御教示下さい。（東京都大田区田園調
布二丁目 山下郷夫 三十六才）

信ずることと、尊ぶことの
違いを考えて、信仰の道に
入ることです。

——お 答 え——

お盆と仏教が結びついていることについ
ては、インドの昔からです。目蓮尊者が地
獄に壁ちたお母さんの苦しみを救おうとし
て、七月十五日、雨期が終って、坊さん達
がこれから行脚に出かける前日、反省の一
日を暮す自恣じしの日に、坊さん達に御供養し
たという故事によるものです。日本では、
丁度、農村では田植も終ってホッと一息つ
いた頃、生活のリズムの合間のひとときに
当るのでこれが風習化されて、色々の行事
が行われるようになったので、詳しいこと
は本号所載の仏教習俗の話をおよみ下され
ばお分りになると思います。
そこで第二の御出問ですが、日本人は色
々の信仰を持っているが、それは善いこと
か悪いことかという意味だと思います。直
截に申しますと、それは悪いことです。信
仰というものは、自分のものなのです。そ
して真剣なものなのです。ですからそれは
これと思い定めたものを、ひたすらに信ず
るべきなのです。お念仏ならお念仏を、ま
っしぐらに信ずることです。法然上人のお

言葉にも

「せこにこめたる鹿も、ともに目をかけずして、人かげにかへらず、むかひたる方へ、おもひきりて、まひらににぐれば、いくへ人あれども、かならずにげらるるなり。その定に他力をふかく信じて、万事をしらず往生をとげんと思べき也」

とありますように、どんなに障碍があつても、一生懸命に信すれば立派に往生が出来るのであります。それを、あれこれと気分を散らせてはよくありません。気分がまとまらぬということは心が動揺している証拠で、それは即ち「疑いの心」です。疑いは信仰とまるで反対のものです。ですから、あなたがそのような気分で神仏を拜んでも、それは決して信仰とはいえないと思います。

信仰というものは、元来、非常に不寛容なものなのです。自分の信仰のほかは、すべて排除するという気持ちのものなのです。ただそうはいっても、それは自分の心持のこととして、この頃町に横行している

創価学会のように、自分の信仰——本当の信仰とはいえませんが——を無理に他人に押しつけるということは、とんでもないことです。

剣聖宮本武蔵は神仏をうやまつたが、決してたよったりすがったりはしなかったといわれます。日本という国は色々の事情から、色々の宗教が入って来て、それが私共の生活に幾重にもかさなって行われているのです。ですから、私共の前には色々の神様や仏様がおいでになります。そして、それはすべて、うやまうべきです。決して無視したり、怪んじたりしてはなりません。しかし、うやまうことと信ずることとは別です。いくら沢山の神仏があつても、自分の信ずるものは阿弥陀如来一仏と定めて、これに没入して、他の一切はかえりみない、そういった心持ちで信ずることです。あなたの場合は、信ずることとうやまうことが混同してしまっているようです。ですから気分が落ちつかないのではないでしょう。私共、時には神社へお参りした

り、キリスト教の教会へ行くことがあります。しかし、そのような場合でも、いつても、手を合せて、口の中でナムアミダブツとお念仏をとなえて頭を下げます。それでもよいのではないのでしょうか。中には、あたりかまわずナンミョウハウレゲキョーと大声を出す人もいますが、これはどおかと思ひます。やはり、静かに心の中で念ずべきでしょう。

さて、色々とお話ししましたが、結局、日本人の宗教生活は複雑です。それは色々の歴史的、社会的な事情でやむを得ないのです。ですから、一応は従来の慣習に従つて、神仏を尊んで、これをうやまうて行くべきですが、自分の信仰内容は、キチンと一本にまとめて、これを中心にして筋を通して行く。これが大切です。

自分が本当に拝み、たより、するべきはアミダ如来であると、しっかり心に刻みつけて、念仏一本にまとめれば、気分もすっきりと、落ちついたものになります。

創作

世尊と阿闍世

——第二回——

鶴田湛泉



三

提婆の訪問を受けた阿闍世は、

「尊者、どうなされたのです。今日は顔色ひどくすぐれませぬが」

日頃と異った悄然とした彼の姿を眺めて、心配そうにたづねた。

「私が気分がすぐれませんが、実はあなたのためでございます」

「私のためとは、一体どういう訳ですか」

自分のためといわれて、太子はいぶかしげにきき返した。

「太子さま、私が申すことをおきき下さい。太子さまはやがて王

位に即かれましようが、いつまでも父王が御在位なされていると、

あなたが王位にあつて権力を振う愉快さを味う期間も短うございます。人の命は甚だ短うございます。それ故、一日も早く父王に代つて政を執る方が得策であると思います。私も、世尊は年老いていられますから引退を迫つて、私が教団の主となろうと決心しています。こうして新王、新仏手をたづさえて摩竭陁国を治めることとなりますれば、誠に天下の快事ではありませぬか」

と甘言を以つて太子を誘おうとした。

さすがに太子は、提婆の無暴な計画に、一瞬全身が鳥肌になる思

いで、

「尊者、そんな恐ろしい話は、よして下さい」

言葉もあららにたしなめ、耳をかすまいとした。

「そうむきになっておこられてはなりません。あなたは父王のこ
とをそれほど大事に考えられますが、あなたは父王に何の御恩もご
ざいませぬぞ」

「何を申すぞ、私は、父王の太子でないか」

「まづおちついて私の申すことをおききなされませ、太子さまが
誕生なされる時に、父王は王妃と太子を殺そうと計られたのであり
まするぞ」

「ええ、何！ 私を殺そうとした」

異外な言葉に、太子が驚いたのも無理はない。

提婆は、ここぞと言葉をつよめて、

「太子が出産なされます時、事もあろうに百尺の高い楼上から地
下の床上に産み落して墜死させようと望まれたのです。不思議に命
を全うされたのは、全くあなたの持たれた福運のおかげでございま
す。私の申すことを若し、偽イツワリと思ひ召すならば、先づあなたの小指
をごらんじませ。それが正しく証拠でございます」

そういわれて太子は、日頃気にしている自分の折れ曲って屈伸の
自由のきかない小指を顔曇らせてじっとみつめ、重ねて、不審げに、

「それはほんとうのことか、いつわりではあるまいの？」

「私は、何故ことさらに、つくりごとを申し上げましょうか」

小指の謎を解かれた思いで、見る間に太子の顔に苦悶の色がただ

よって来て、

「尊者、もっと詳しくきかせてくれぬか」

とせきたてた。

請われるままに提婆は、太子誕生にからまる秘密をすべて打ち明
けてしまったのであった。

無染、無汚、清澄な太子の心に与えたショックは大きかった。太
子は、呆然と殆んど放心の状態である。

泣きくづれている太子の耳許に、提婆は、更に何事かをささやい
たのであった。

いかに呪われた自分の運命であったことか、父王や母夫人は、何
という恐ろしいことをされたことか。父母の愛情に対して懷疑的と
なり、今まで天真爛漫であった太子にも、それ以来懊惱の日が続い
た。

果ては父王への信愛の情はくつがえされ、引き裂かれ、畏敬の念
もうすらぎ行き、そののみか、父母を深く信愛していただけ、憎悪
の念も深まって行った。

父子であって父子でない感情を抱くに至ったのか、或る日、王の
室に近づいていた太子の懷中深くに劔が潜カクレばされていた。

さすがに恩愛の情にむすばれてか、足はあやしくふるえ、王の室
へ入り切れず幾度か思い返して室外で躊躇チウチュウしていた。

顔面蒼白となって殺氣を含んだただならぬ太子の容子に気付いた
王の侍臣は、驚き怪しんで王に告げた。

「太子さまのお顔色は、ひどくすぐれませぬ。何事かを心に企ん

でいられるに相違ございませぬ。」

侍臣の言葉に、王は太子を膝下に呼んでやさしくたづねた。

父王の愛情にこもったいたわりの言葉に接すると、太子はやはり自分の思い違いであったと後悔して、つつみ切れず涙と共に懺悔しすべてを正直に告白したのであった。

年若な太子が提婆の巧みな言葉に誘惑されている心を思うと、王はむしろ不憫にさえ思われた。太子のためには、何物をも犠牲にしても惜しくはないと思っていた王は、群臣の間には種々の議論があったが、その反対を押し切って太子の望んでいる王位を何の躊躇することもなく譲られることとなった。王はただ太子の幸福をのみ念願されていたのであった。

にもかかわらず、太子が王位に即いたのみでは満足し切れなかったのは提婆であった。

（父王をこのまま生かして置いては、いつかは再び王位に復することもあるう）

万一王位に復された時のことを恐れ、王を捕えて宮殿に幽閉して食を断って餓死させようと再三太子にすすめるに至ったのである。

未だ十六七才で未だ常識も発達せず、思慮分別も十分定かでない新王のことである、阿闍世王は、老獪な提婆の密のような甘言にそのかされて次第に心が動揺し初めていた。

四

人の子としての良識も麻痺してしまったのか、阿闍世王は父王を七重の厳重な獄舎に監禁してしまうと、非道にも飲食を断って自然

に餓死に至らしめようとしたのであった。勿論一滴の水さへ与えない。近臣との面会も一切許すはづがない。獄舎には数人の衛士をつけて監視せしめ、大臣といえども入ることを厳しく制したのは、近臣が王と内通することをおそれたがためであった。

日頃多くの侍臣に扈從されていた王も、今は誰一人傍にはいない。王は臣下と外界から完全に遮断されてしまって、昨日までは印度での覇者も、今日はすべての権力を剝奪され、暗い牢獄の一介のわびしい囚人となり果ててしまっていた。

一方の壁に切窓一つしかない寒々とした氷室のような獄舎の中は寂として物音一つきこえて来ない。窓外には、遙か彼方の山のあたりを去来する雲のみが見えるだけである。

昨日までは、王としての誇りと安泰とを感じていたが、今は一切が虚亡の如くさえ思われる。夢であるかと思えばうつつ、うつつかと思えば夢の如しとは、けだしこのことか。

測々として身にしみるのは孤独感である。

寂漠とした暗い牢中で一粒種子の我が子によって一生を封ぜられた前途を思うと、王は暗澹として白い吐息をのみついていた。

一方、韋提華夫人は、王の身を案ずると心は千々に碎けて身もそぞろに夜も眠ることが出来ないでいた。

「さぞ、ひもじい思いをされているであろう」

そう思った夫人は王に食事を運ぼうとしたが、阿闍世王から固く制止されている衛士が勿論許すはづがない。

（どうしたらよからうか）

ほとほと思案もつきかねていた。

しかし、案ずれば通ずるの譬で、夫人はやっと一策を案ずることが出来た。

香湯に入って沐浴して身を洗い浄めると、香油の変りに清めた身体に酥（牛乳で製したもの）と密（蜂蜜）とを一緒にしたものを麦粉に和して身に塗り化粧した如く装うと浄衣をまとい、装りの瓔珞の玉の中に葡萄漿を入れて徐ろに牢舎に近づいて行った。

王に面会したいとの申出には、外ならぬ王妃のこととて、衛士も無下に拒むことは出来なかった。

衛士にも怪しまれず、やっとの思いで薄暮のような獄舎に入った夫人は変り果てた王の姿を眺めて驚かざるを得なかった。

僅か数日の間に、あわれはや王は獄舎の苦さと飢えにつかれて見る影もなく憔悴し果てているのではないか。顔面は蒼白となり、目はおちこみ、頬はこけて、ヒゲはのびまるで余人の如くである。

「ああ、おいたわしや、このみ姿！」

王の傍へ馳せよった夫人の目には一すじの涙がにじみ初めると、後はたきつせのように流れ落ちて来た。

「おお、韋提華！」

おどろき見やる王の目には、生色がない。

「獄吏が食を絶って以来というもの、飢えは日毎に我が骨肉を嚼み、まるで数百の虫が腹中であばれ廻っているような苦しきである。我が命も既に迫って来たようだ」

どこからか手が現れて、一片の食物でも投げ与えてくれることを

望み夢みていた程であった王は、夫人の顔を見ると同時に、焼きつくような渴きと、目のくらむような飢えの苦痛を訴えたのであった。

「誠に世尊が教え給うように、人のさかえはいつまでもつづき難く夢幻のようである。恐ろしい報いが、早や私達の身に襲って来たのだ」

囚われの身となって、今までの王者という幸福が雲散してしまつたのも、外ならぬ肉親の我が子のためであると思うと、出産の因縁を想い起して、業報のおそろしさに戦慄し目は涙に光っている。而し、王は我が子を怨む気になれないでいた。

王の言葉にこらえかねてむせび泣いていた夫人は、やっとな涙をぬぐって、

「お食事を持って参りました。早やばや、召し上り下さいませ」と身に酥密を集めて王にすすめた。

王は瓔珞の玉の葡萄漿を一滴、一滴、ゴクリゴクリと一滴もこぼすまいと甘露の思いで吞みほした。

食事といってもほんの僅かのものであったが、日頃贅沢な飲物や、山海の珍味に飽食していた王にも、これ以上の美味は味わなかったであろう。

やがて水を求めて口を嗽ぎ終った王は全く蘇生の思いである。

「王位にあった時は食物も心のままであったのに、今は牢舎に囚えられて餓のため死のうとしている。自分は死することは少しもおそるるところでないが、ただ舍利弗、目蓮等と今一度、道の奥底を語り合いたいと願うばかりである。誠に殃惡が人を追うことは、影

の形に添う如く響の声に應ずるようである。み仏に逢つて仏の教えをきくことは、も早や出来なくなった。自分は間もなく命終つて遙かなところへ行くであろう。夫人も慎んで仏の教えを守つて後の禍を防がれるがよい」

光さえ奪われた牢獄で、遅かれ早かれ朽ち果てて行くことを悟つた王は、初めて人生を凝視したのであった。

今の王に取つて慕い想われるのは、日頃道をきいていた世尊のことのみであつた。

一つしかない窓外に遙かに遠く雲の去来するあたりに見える耆闍崛山の翠峯を望み仰いで、王は世尊を遙拝するのであった。

耆闍崛山は、王舎城の東北二里余りの近くにあって、孤峯高くそびえ、緑の色は或は淡く或は濃く陽に美しく輝いていた。かつてこの山に鶯が多く棲んでいたところから鶯峯、又は靈鶯山と称せられ、又犬鶯が羽を伸ばして飛び上ろうとしている形に似ているので、そういわれるようになったといわれ、世尊はこの山の精舎に於て法を多く説かれ、多くの仏弟子もここで道を修めていた。

かつての日、王は嶮峻な三里余りの山道を自ら法をきくための便利のために切り開いて、谷を埋め岩を砕いて広さ十余歩の広い道を造り石を疊んで階とし往来の便を計った。

世尊より年少であつた王は、世尊の出家の時から浅からぬ因縁があつた。

迦維羅城を出奔された世尊が、たまたま王舎城を通られた。

その時、王は世尊を呼びとめられて、

「あなたは何が不足で出家なされるのでございます。若し迦維羅一国で不足と思われまますなれば、私の国を献上してもよろしうございますから出家などは思い止まって下さい」

と自国を献じてまで思い止めようとしたのであった。

世尊は、王の好意を謝しながら、

「私は国が不足で出家するものではありません。解脱を求め菩提の法を明らかにしようとして出家するのです」

深い決意のほどを打ち明けた。

いたく感動した王は、

「さようでありますならば、覺りを開かれた暁には、必ず私を教えて下さるように」

と固く約束したことがあつた。

過去のこうした出来事を想い浮べながら、遙かな耆闍崛山に向つて跪拝していた王は、

「目連は私の親友でありますから、願くば私を愍んで八戒（一夜を限つて在家の者が受ける戒）を授けて下さいますように」と世尊の加護を乞ひ願つたのであった。

王の念力が世尊に通じたものか、目連は神通力によって鷹の如く隼の如く王宮の獄舎に飛翔して来て、八戒を毎日授けたのであつた。

更に世尊は、説法第一の弟子である富樓那を遣して、王のため説法せしめたのであつた。

王は毎日に夫人の運び来る僅かの食物によって身体を養ひ、目

蓮、富樓那から法をきいて憂悩が除かれ精神を養い得たので、命がいつ終るかとの不安もいささかもなく、安緒を得ていたので、暗い獄舎にあっても、王の顔には、憔悴の色はいささかも見受けられなかった。

五

既に三七日も経った或る日、阿闍世王は牢舎の衛士を呼んで、

「父の王は、今尚健在であるか」

ときいた。獄舎に監禁して以来、少しも飲食を与えずに早や幾日も経っていることとて、既に父王はこの世にいないに相違ないと心中ひそかに期していたが、親子の情からさすがにあらわにききかねたものらしい。

「ハイ、大王は、今尚健全に在します」

予期に反した意外な答えに、王は氣も顛倒するばかりに驚天してしまったのも無理はない。

あり得るべからざることのようにいぶかしく思った王は、衛士を強く責めてその理由をききただした。

衛士は、王からいかなる処罰を受けるかも知れないと恐れたのか、王の厳しい詰問にあって今は詮方なく王妃が日々人にわからぬよう身に酥密を塗ってひそかに王に食物をすすめていられるらしいが、臣下なればともかく国の大夫人であるので、王と対面を願われることまで拒み切れなかったこと、その上、目連、富樓那が獄舎に王を詣ねて説法されているが、尊者等は神通力によって虚空から通って来るので人力ではどうすることも出来なかったことなどわびな

がら、全ての事実をつつみかくさずに物語った。

きいているうちに、王の唇はピリピリと動き、「ウーム」と怒りのため満面朱をそそいだ。

自分の計画が母によって見事に裏をかかれていたことを知った王は、母に対して逆上するような新たな怨みを感じたのであった。

「おのれ」

劒をとるや否や、憤怒の形相ものすごく母の部屋へあわただしく駆けこむと、

「賊を庇う上は、母もやはり賊でありますぞ、妖術を用うる沙門も亦同類でありますぞ」

と叫びながら怒りの火焰に心も錯乱したのか、王は母の頭髮をむんずとつかんで引きよせると、ぬいた劒を胸に擬してまさに刺そうとした。

「アレー」

韋提華夫人は、痛さを忘れて、悶絶するばかりに驚いた。

その時、あわただしくこの場へかけつけて来た大臣の月光と耆婆は、王の狂氣のふるまいに身の毛をよだてながら、

「王、何をなされまする」

と左右からひっしといだきとどめて、母の髪の毛をつかんだ王の手を放たしめた。

韋提華は、王の前に膝つき手を合せ頭をたれて、

「勘弁して下さい。私が悪うございました」

と熱い涙を流して謝り、肩ふるわせて悲泣するのであった。

「にくい母上！」

王は、尚も憎悪にみちた目で、母を睨めすえている。

聰明多智の名臣と謳われている大臣の月光は、悪魔に魅せられたような王の行為に胆を冷やしながらかう諫めた。

「大王、心をおちつけておき下され。私共がきいていますのに、天地開闢以来、悪王が王位を望むがために我が父を害したものは一万八千にも及ぶということですが、しかし無道にも母を害した王は未だ一人もなかったということです。しかるに今大王が、かかる悪逆を犯されたならば、王族の名を汚すものです。どうして私共が黙視することが出来ましようか。さような人非人の行為を敢てなさるならば、王宮に一刻もお出で願うことは叶いませぬ」

言語同断、人道をふみはづした鬼畜のなされ方と、言いほらわだをしぼり、血涙を流さんばかり、言葉に激しながら、真情を吐露し言葉をつくし、今後、暴君となって臣下に対してどんな暴虐をもおこさないとも限らないことを恐れ、且つは一国の危機にも及ぶことと必死になって諫めたのであった。

二臣のただならぬ凄気に圧倒され、たちろきながら、王は声をふるわせ耆婆に向って、

「耆婆、そなたはなぜわしのために計ってくれないのか」

父王の弟であり、日頃眷顧をかけている耆婆までが、自分を批難する態度を心外らしく訴えた。

「悪事に与することは断じて出来ませぬ。」

一徹な賢臣耆婆は、声を強めて叱咤するように諫めた。

さすがに王も、賢臣たちが死を以ってする諫言に躊躇せざるを得なかった。

有力な大臣が自分に対して快よく思わなかったなら、将来権勢のある彼等の協力を得られないのみならず、自分に背いて父王と通ずる事があるかも知れないと恐れ、思い直してやっと劔をもとの鞘におさめた。

昂奮も静まり、やや平静になった王は、

「母を刺そうとしたのは自分の思い違いであった。許してくれ」

いささか自分の行為を悔いられて来た。

「よく私共の言葉をおきき入れ下されてありがとうございます」

二臣は、ほっと安緒することが出来た。

「では國務もありますれば、部屋に退りまする」

月光と耆婆は、うやうやしく叩頭して辞し去ろうとしたが、王の目ざしは未だ異様に血走っている。

激語を以って諫止したこととて王の怒をかつて劔を振って自分達に危害を加えるかも知計り知れなかったので、万一を考え劔を握って用心しながら、二人はあとずさりになって王の部屋を退いて行った。

王は、二臣の諫言を入れて母を許しはしたが、尚余曠があつて鬱憤が胸中にみなぎり釈然たらざるものがあつたのか、そのままに捨てはおけぬと、母をも深宮に幽閉して再び父王と相まみえることを得しめないようにしてしまった。

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 竹中 信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円十八円

側々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰の遺文にみる 佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

「浄土」の会員に一人でも多くなつていただいて、
正しい仏の道の信仰をひろめましょう

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

七月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年六月廿五日 印刷

昭和三十五年七月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人鑽仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二一八七番

大正大学教授 竹中 信常 著

宗教儀礼の研究

青山書院刊
A 本文 538頁
定価 九百〇円

宗教は実際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところでは、信仰と儀礼の一致相即である。本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめる。

内容

特価 800円
送料当方負担

- 第一編 儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼
- 第二編 儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼
- 結論 礼儀と信仰

ヤスパース著

大正大学講師
峰島 旭雄訳

仏陀と龍樹

理想社刊
B 本文 256頁
定価 三三〇円

現代西洋の卓越せる哲学者ヤスパースが十年の歳月を費して公けにした論著。西洋哲学の立場から仏教を新しく評価解釈し、これをきわめて平易な言葉で敘述している。

東京都品川区上大崎一の七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京 八二二八七番

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞

(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田